

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 5 日現在

機関番号：11101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520276

研究課題名(和文) ニュージーランド文学におけるポストコロニアル・アイデンティティの形成

研究課題名(英文) The Formation of Postcolonial Identity in New Zealand Literature

研究代表者

澤田 真一 (Sawada, Shinichi)

弘前大学・人文学部・准教授

研究者番号：30250624

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ニュージーランドにおいて、多文化・多民族の共生を希求し、可能にするポストコロニアル(植民地主義後)アイデンティティが形成されていく過程を、ニュージーランドの先住民族マオリの文学に焦点を当て、解読することを通じて明らかにした。

特にウイティ・イヒマエラの神話的手法に注目し、マオリの神話・伝統を現代というコンテキストの中に置き直し、再解釈することを通して、差別を再生産する家父長制に陥らない共生のアイデンティティの構築の仕方を示した。

研究成果の概要(英文)：This research clarified the process in which a postcolonial identity was formed, by analysing the Maori literature in New Zealand.

Special emphasis was put on Witi Ihimaera's mythical method. By recontextualizing and reinterpreting the Maori myths and tradition, he was able to create a new identity of co-existence without returning to Maori patriarchy.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学、英米・英語圏文学

キーワード：英語圏文学 ニュージーランド文学 マオリ文学 ポストコロニアル文学

1. 研究開始当初の背景

一方的な白人文化への同化主義からマオリとの二文化主義、そして多文化主義へと変容を続けるニュージーランドは、先住民族マオリの目にはどのように映ってきたのか。カナダ、オーストラリアのポストコロニアル・アイデンティティの研究は盛んであるが、ニュージーランドの、しかも先住民族の視点からの研究の歴史はいまだ浅い。

白人のナショナリズム、マオリのナショナリズムを超えて、多文化主義の受容に至ったマオリ文学の第一人者ウィティ・イヒマエラの言説の中に含まれる共生の思想を研究することは、多文化社会へ将来的に移行せざるをえない日本社会にとっても貢献するところは多大であると思われる。

本研究の担当者は、ウィティ・イヒマエラの代表作の一つである *The Whale Rider* を日本語に翻訳(邦題『クジラの島の少女』角川書店、ハンナ・サワダとの共訳、2003年)した経緯もあり、2006年6月にはニュージーランド大使館の援助により、イヒマエラ氏を日本に招聘し、東京・大阪・弘前で講演会を実現することができた。翻訳のためにすでにマオリ語の基本的な知識を習得しており、知己を得た作家との直接の交渉を通じて、マオリ文学の内実にも迫ることが可能となると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、ニュージーランドにおいて、多文化・多民族の共生を希求し、可能にするポストコロニアル・アイデンティティが形成されていく過程を、マオリ文学に焦点を当て、解読することを通じて明らかにすることを目的とする。

1840年にワイタング条約により、英国の植民地として出発したニュージーランドは、マオリ語の公用語化、ワイタング審判所による過去の補償(土地戦争により不当に収奪されたマオリ土地の返還、金銭的補償等)に見られるように、理想的な二文化共存をうたっている反面、マオリ的価値観とヨーロッパ的価値観の相克の歴史も内包している。

1970年代のマオリ・ルネッサンスと呼ばれる芸術運動の中で、それまで沈黙を強いられてきたマオリ作家たちは、自らの言葉で自らについて語り始めた。彼らの言説は多岐にわたり、白人を攻撃するもの、分離主義的なもの、自文化を否定するものさえ存在するが、その中で、イヒマエラを中心に白人との共生を模索するものも立ち現れてきた。彼らの言葉・物語を、必要な場合には白人作家の言説と対比させながら、イヒマエラを中心に考察をすすめていく。

本研究は、便宜上、イヒマエラの表現者としての現在までの足跡を、マオリの失われた過去をノスタルジックに描いた第一期、白人

主体の歴史認識に一石を投げ、政治色を強めて白人を糾弾した第二期、マオリと白人の共生のみならず、多文化共生の道を模索した第三期に分けて論じていく。

3. 研究の方法

小説は美的作品であるのと同時に、特定の社会的力関係(植民者による支配と先住民族の抵抗運動のせめぎあい)の中で作り出された生産物であるという見地に立ち、イヒマエラを中心としたマオリ作家の小説を、単なるテキストの読みだけでなく、現地での調査・取材を通して解読していく。

研究は、初年度にニュージーランドに赴いて調査研究を行い資料を収集する。オークランドを中心に、オークランド大学、オークランド工科大学、オークランド市立図書館等で資料の収集をするとともに、ウィティ・イヒマエラ、及びオークランド工科大学マオリ学部学部長であるパレ・ケイハ教授と面談し、直接研究についてのアドバイスと批判をいただく。

2年度目からは初年度に収集した資料、データを利用した研究を、国内で行う。そして、3年にわたる研究の成果として、差異が差別につながらない「個」および「社会」のアイデンティティのモデルを提示する。

4. 研究成果

イヒマエラは、自分の生まれついたエスニシティを、思索のためのひとつの資源として捉え返している。前近代的であるとしてヨーロッパ系白人から軽んじられ、否定され、周縁に追いやられてきたマオリ文化を、彼は西洋文化の前で拒絶してしまわずに、脱植民地化という自己と民族の解放運動の中で、差別を再生産することのないより洗練されたものとして取り戻そうとしている。

本研究は、まず始めに、イヒマエラがマオリの伝統的なシンボルである koru(コル、らせん模様)の運動性に基づいた過去の最文脈化・再解釈という手法によって、マオリの神話・伝統に新たな意味を与え、そこからより高次の調和・共生のアイデンティティ(特に男性と女性の調和)を導き出していく過程を明らかにした。この手続きによって、マオリの伝統的な価値の体系も変更を迫られ、マオリ家父長制を維持するために機能してきた tapu(タブ、禁忌)の上に、より高次の概念として aroha(アロハ、分け隔てのない愛情)と mauri(マウリ、命の原理)が置かれることになった。

新たな調和の上に真の主体性を確立したときに、マオリ文化は白人文化に抗するアンチテーゼとしての主体の位置を獲得し、二項対立の構造を二文化共生に作り変えていくことが可能になる。

イヒマエラはニュージーランド文学の起

源にキャサリン・マンスフィールドの作品を位置づけ、自らの文学作品を通じて、彼女との文学的な対話を試みている。マンスフィールドはいくつかの短編作品を通じて明らかに先住民マオリに対して問いかけをしており、イヒマエラはそれに応じる形で作品を発表した。問いはニュージーランドに存在する目に見えない「境界」に関するものであり、それらは第一にマオリと白人との間に存在する境界、第二に白人入植者と大地との間に存在し両者の和解を妨げる境界の問題であった。

白人にとって「呪われたもの」である大地は、マオリにとっては母なる大地 Papa の愛し敬うべき体である。マオリ神話は聖書とは異なる、人間と大地（自然）との親密な関係について教える。白人はマオリの仲介を通して、大地との間に新たな関係を結ぶことができるようになる。ただし彼らは、その前提条件として、自らの罪（土地の不正取得等）を購わなければならない。マオリ文学は白人の罪を告発し糾弾する。忘却してきた過去に直面し、入植起源の暴力と不正を清算するときに、白人は恐れから解放され、大地との絆を確立することができるようになる。

マンスフィールドの問いかけへの応答を通して、イヒマエラは文化的・文学的な対話を構築していった。マオリ文化とヨーロッパ文化の接触から、新たなニュージーランド独自の文化を作り出すことは可能である。ステレオタイプという表象の罠に陥ることなく、幻想から目覚め、「他者」の真の姿にまみえるとき、境界は取り除かれ、マオリと白人、人間と大地との間には和解がもたらされる。そしてその時に「恐れ」は「歓喜」に変わる。これがイヒマエラがマンスフィールドに代表される白人文学の問いに差し出した応えであった。

両者の対話をさらに弁証法的に発展させ、ニュージーランド文学を次なるステージに導いていくことができる作家の登場が待望される。

本研究は、1972年にマオリ人作家により始めて出版された記念すべき短編集 Pounamu, Pounamu から、Tangi (1973)、彼を世界的に有名にした The Whale Rider (1986)、問題作 The Matriarch (1987)、ニュージーランドを代表する白人作家マンスフィールドへの応答である Dear Miss Mansfield (1989) を経て、思想的な円熟をみる The Rope of Man (2005) までを主なテキストとして読み解き、彼の発表したエッセイ、インタビューと関連付けることを通して、イヒマエラの思想形成の足跡を辿った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

澤田 真一、イヒマエラとマンスフィールドによる文学的対話：パール・ボタンの誘拐をめぐるふたつの物語、南半球評論、査読有、第29号、2014、pp.33-45

澤田 真一、ニュージーランド文学におけるポストコロニアル・アイデンティティの形成：より高次の調和を求めてのイヒマエラによる脱植民地化の過程、日本ニュージーランド学会誌、査読有、第21号、2014(近日出版予定)

〔学会発表〕(計3件)

澤田 真一、ニュージーランド文学におけるポストコロニアル・アイデンティティの形成、日本ニュージーランド学会第68回研究会、東京外国語大学、2014年3月1日

澤田 真一、イヒマエラとマンスフィールドによる文学的対話、Katherine Mansfield 没後90周年記念シンポジウム、日本女子大学、2013年11月9日

澤田 真一、マオリの文化的資源、東北公益文科大学ニュージーランド研究所創立10周年記念シンポジウム、東北公益文科大学、2012年6月23日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織
(1) 研究代表者
澤田 真一 (Sawada Shinichi)

弘前大学・人文学部・准教授
研究者番号：30250624

(2)研究分担者
()

研究者番号：

(3)連携研究者
()

研究者番号：